日本中國學會報　第七十集
二〇一八年十月六日　發行　抜刷

『京氏易傳』八宮構造の繼承

――『周易集解』を中心に

早川　泉

『京氏易傳』八宮構造の繼承

――『周易集解』を中心に

早川　泉

序

前漢の易學者・律曆學者である京房の作とされる『京氏易傳』は、漢代象數易を代表する著作であり後の易學にも大きな影響を與えたと言われる。筆者は以前『京氏易傳』獨自の六十四卦構造である八宮説とそれにまつわる占筮技法であるとされる飛伏説の思想的關係を論じ、そこで八宮説の根底には八宮卦の「正性」というアイディアがあり、飛伏説はその盛衰を一定の規則に從って表現している、という結論を得た[1]。兩者の間には、象數易の「牽强付會」的なイメージとは裏腹に、我々にも十分理解可能な體系性が存在している。この體系性がどのように繼承されたのか、本論では、唐以前の象數易説の集積とされる『周易集解』を材料に、その繼承の有樣を檢討する。

1　八宮説と飛伏説について

1-1　八宮説

『京氏易傳』は、通行本『周易』とは異なる六十四卦の卦序によって成立している。この卦序を「八宮」という。これは十二消息卦に着想を得たものであると言われる。十二消息卦では十二ヶ月に十二卦の卦象を當て、氣候の變化を卦象の變化になぞらえて説明しようとする。すなわち、古代の冬至は十一月に當たる。冬至は日照時間の最も短い日だが、同時にここから日照時間が伸張に轉じる＝陽氣が伸張に轉じる日でもある。この點に注目して十一月に復䷗を當てる。以後は四月の乾䷀まで、下から上に一爻ずつ陽氣が伸張していく。五月は夏至に當たり、ここから日照時間が短縮する。陰陽で言えば陰氣が伸張に轉じる。よって五月に姤䷫を當て、以後十月の坤䷁まで下から上に一爻ずつ陰氣が伸張していく。

十一月	五月
復 ䷗	姤 ䷫
十二月	六月
臨 ䷒	遯 ䷠
正月	七月
泰 ䷊	否 ䷋
二月	八月
大壯 ䷡	觀 ䷓
三月	九月
夬 ䷪	剝 ䷖
四月	十月
乾 ䷀	坤 ䷁

この下から上に一爻ずつの卦變で六十四卦全體を包括しようとしたのが京房の八宮であると理解できる。八純卦（乾・坤・震・巽・坎・離・艮・兌）を起點とし、下から上へ一爻ずつの卦變を施す。しかしある八純卦の六爻すべてを變じてしまうと別の八純卦になってしまう。そこで京房は上から下への卦變を考案した。すなわち、五爻まで變じたあとに四爻を元に戻して一卦を得、さらに下半分の三爻・二爻・初爻を一擧に變じてもう一卦を得る。これにより一つの八純卦から八つの卦が得られ、八八六十四卦が過不足なく得られる。圖示すれば以下の通り。

	乾	震	坎	艮	坤	巽	離	兌
上世	乾䷀	震䷲	坎䷜	艮䷳	坤䷁	巽䷸	離䷝	兌䷹
一世	姤䷫	豫䷏	節䷻	賁䷕	復䷗	小畜䷈	旅䷷	困䷮
二世	遯䷠	解䷧	屯䷂	大畜䷙	臨䷒	家人䷤	鼎䷱	萃䷬
三世	否䷋	恆䷟	既濟䷾	損䷨	泰䷊	益䷩	未濟䷿	咸䷞
四世	觀䷓	升䷭	革䷰	睽䷥	大壯䷡	無妄䷘	蒙䷃	蹇䷦
五世	剝䷖	井䷯	豐䷶	履䷉	夬䷪	噬嗑䷔	渙䷺	謙䷎
游魂	晉䷢	大過䷛	明夷䷣	中孚䷼	需䷄	頤䷚	訟䷅	小過䷽
歸魂	大有䷍	隨䷐	師䷆	漸䷴	比䷇	蠱䷑	同人䷌	歸妹䷵

易占においては、一般的に「占って得た卦の一部が變化して別の卦になる」という發想があり、占う際にはその變化する部分を重視する傾向があるが、八宮でも卦變の流れに沿って、前の卦から變化した爻を特別に「世爻」と呼んで重視する。一世卦の世爻は初爻、二世卦の世爻は二爻、三世卦の世爻は三爻、四世卦の世爻は四爻、五世卦の世爻は五爻、游魂卦の世爻は四爻となる。なお上世卦の世爻は上爻、歸魂卦の世爻は三爻である。

1-2　飛伏說

飛伏は從來二重の誤解を受けて來た。第一にその規則について、第二にその思想的意義についてである。

まず飛伏の規則について述べる。一般に飛伏は、占いの便宜のために一つの卦に對してさらにもう一つの卦象を加えるものだと說明されている。[2]「見えているものが飛、隱れているものが伏」「陰の裏には陽が、陽の裏には陰が隱れている」という原則のもと、ある卦の裏にはその卦象をすべて反轉した卦が潛んでいる、という解釋が長らく支配的であった。[3]例えば乾䷀が「飛」であれば「伏」が坤䷁、震䷲が「飛」であれば「伏」は巽䷸といった具合である。しかし「京氏易傳」を實際に見てみると、この規則はごく一部の卦でしか通用していない。たとえば姤䷫は「與巽䷸爲飛伏」となっているが、これは上に提起された原則に合わない。これを見拔いている先達は六十四の飛卦に對して八純卦を伏卦として配當するという說明を行っているが、[4]後に述べるようにこの解釋もなお不十分である。

飛伏の機序を正しく理解するには上下體に注目する必要がある。たとえば、姤䷫は「與巽䷸爲飛伏」だが、姤䷫の下半分には巽☴が出

ている。「見えているものが飛」なので、この卦では「飛」が巽、そして乾宮の卦は乾☰から變化したものなので乾☰が隠れていると考え、「伏」は乾となる。

同様に、剝䷖の上半分は艮☶なので「飛」は艮、乾宮の卦なので「伏」は乾となる。この規則に則ると、六十四卦の半分以上では、その卦が所屬する宮を代表する八卦が「伏」となっていることがわかる。

上世卦と歸魂卦についても「見えているものが飛」の原則は變わらないが、伏卦の扱いが異なる。例えば乾宮歸魂卦大有卦は世爻が三爻、よって下體の乾☰に注目する。乾が「飛」、「伏」はそれを「變」じた坤となる。これは從來考えられていた「飛伏」に最も近い。

游魂卦も飛卦については上二種と同様だが、伏卦については獨特の扱いがあり、前の五世卦の「飛」が游魂卦の「伏」となる。たとえば乾宮の游魂卦は晉䷢で、上半分に注目すると離☲が見えているので「飛」は離☲。これはその他の卦と同様だが、晉䷢は剝䷖から變卦したので、晉䷢の「伏」は剝䷖の「飛」である艮となる。

上下どちらの半分に注目するかは、その卦の世爻によって決まる。つまり、世爻が下半分にある場合は下體、世爻が上半分にある場合は上體に注目する。たとえば姤䷫は乾☰から初爻が變化した形なので世爻は初爻、よって下半分の巽☴に注目する。一方晉䷢は剝䷖から四爻を變化した卦なので世爻は四爻、よって上半分に見えている離☲に注目する。乾☰坤☷のような八宮卦では上爻が世爻なので、上半分に注目することになる。

飛伏の機序について要點を擧げれば以下の通り。

1) 上世卦・歸魂卦の場合、世爻を含む八卦を重ねた卦を「飛」、それを「變」じた八卦を重ねてできる八宮を「伏」とする。上に朱伯崑が述べた「飛伏」である。例えば乾宮歸魂卦大有䷍の場合、世爻は三爻、それを含む八卦は乾☰。これが「飛」であり、納甲は乾宮のものに則る。さらにこれを變じて坤☷となし、それを重ねた坤☷の司る坤宮を「伏」として指定する。

2) 一世卦から五世卦の場合、世爻を含む內象あるいは外象の八卦を重ねた卦を「飛」とし、屬する宮の上世卦を「伏」とする。例えば乾宮一世卦姤䷫は世爻が初爻、それを含むのは下體の巽☴である。ゆえにこの八卦を重ねた巽☴の司る巽宮の納甲に則りこれを「飛」とし、また本來屬する乾宮を「伏」とする。

3) 游魂卦の場合、世爻を含む八卦を重ねた卦を「飛」、世爻が變じる前の八卦を重ねた卦を「伏」として指定する。その特性から必然的に五世卦の「飛」と同じ八宮を「伏」として指定する。

次に飛伏の思想的意義について述べる。先回りして言えば、飛伏は今まで言われていたように單に占いの際に附會の材料を用意するだけでなく、八宮という枠組みのもつ世界觀の一部を表現したものでもあるのではないか、というのが筆者の見解である。

次圖は坤宮において、坤宮を代表する卦である坤が「飛」と「伏」にどのように表れるかをまとめたものである。

順に見ていくと、上世卦では坤が「飛」に現れているが、一世から五世までは「伏」に移動している。游魂卦でついに「飛」からも「伏」からも坤が消えてしまうが、歸魂卦において再び「飛」に坤が戻ってくる、という様相である。

ここで「正性」という概念に注目したい。「正性」は『京氏易傳』

世卦	卦名	飛伏表記	納甲	飛	伏	正性
上世卦	坤䷁	與乾爲飛 伏	癸酉金、壬戌土	坤䷁	乾	最大
一世卦	復䷗	與震爲飛 伏	庚子水、乙未土	震	坤	小
二世卦	臨䷒	與兌爲飛 伏	丁卯木、乙巳火	兌	坤	小
三世卦	泰䷊	與乾爲飛 伏	甲辰土、乙卯木	乾	坤	小
四世卦	大壯䷡	與震成飛 伏	庚午火、癸丑土	震	坤	小
五世卦	夬䷪	與兌爲飛 伏	丁酉金、癸亥水	兌	坤	小
游魂卦	需䷄	與兌爲飛 伏	戊申金、丁亥水	坎	兌	「潰亂」
歸魂卦	比䷇	與乾爲飛 伏	乙卯木、甲辰土	坤䷁	乾	最大

において五世卦・游魂卦・歸魂卦を説明する際に頻出する言葉で、意味合いとしては「八宮卦本來のはたらき」とでも理解すべきものである。八宮卦は「下から上へ」の卦變を繰り返すが、それによって元の卦象は次第に失われていき、五世卦に至ってもとの卦象はほぼ全て失われる。この卦變に、京房は「正性」の衰退を見出だす。すなわち五世卦と游魂卦の際に正性は「潰亂」する。[5] しかし盡きることはなく、歸魂卦において下體に宮卦が復活し、正性も初期の勢力を回復する。[6]

「正性」を踏まえてもう一度飛伏を検討すると次のようになる。

① 八宮卦である坤䷁においては坤の「正性」は最大限發揮されており、そのことは坤☷が「飛」に見えていることに表れている。

② 一世卦から五世卦においては坤が「伏」に移動している。これは坤の「正性」が弱まって、潜んだ狀態になっていることを表している。

③ 游魂卦に至って、坤の「正性」は「潰亂」する。そのことは、ついに「飛」だけでなく「伏」からも坤が消えてしまうことによって理解される。

④ 最後の歸魂卦は「正性」が取り戻される卦。下半分に坤☷が戻り、坤が「飛」に表れ、初期の勢力を回復する。

以上を要するに、八宮とは、十二消息卦が示した「往來不窮」の精神を十二卦から六十四卦に押し廣げた京房の獨創であると評價できる。その「往來不窮」の核心である八純卦の「正性」の勢力を示すことが、「飛伏」という概念の（占いのための道具にとどまらない）思想的意義だったのである。

2　八宮說・飛伏說の繼承

『京氏易傳』の提起した諸概念は後世の易學に多大な影響を及ぼしたとされる。[7] そこで『京氏易傳』の中核である八宮說と飛伏說の繼承の様相を、唐代までの象數易說の集成であるとされる『周易集解』中の記載から檢討することで、その影響の實際を見てみたい。

2-1　『周易集解』における八宮

『集解』中に登場する易家のうち最も八宮に言及するのは干寶である。それ以外にも『九家易』や荀爽が八宮について言及している。八宮に關する言及は五世・游魂卦・歸魂に關するものに偏っている。それはやはり正性の消滅と復活という八宮說の妙味が、このあたりに最も良く現れるからであろう。

『集解』中で八宮に言及する例は總じて八卦の正性の盛衰という八宮の含意をよく踏まえており、『京氏易傳』の眞面目を失っていない。

需 ䷄

【經】物稚不可不養也。故受之以需。需者、飲食之道也。（序卦傳）

【注】干寶曰、需、坤之遊魂也。雲升在天、而雨未降、翺翔東西、須之象也。王事未至、飲宴之日也。夫坤者、地也、婦人之職也、百穀果蓏之所生、禽獸魚鱉之所託也。而在遊魂變化之家、卽烹爨腥實以爲和味者也。故曰「需者、飲食之道也」。（『周易集解』卷二）

【經】物稚ければ養わざるべからざるなり。故に之を受くるに需を以てす。需は、飲食の道なり。

【注】干寶曰く、需は、坤の遊魂なり。雲升りて天に在るも、雨未だ降らず、翺翔東西するは、須の象なり。王事未だ至らず、飲宴の日なり。夫れ坤は、地なり、婦人の職なり、百穀果蓏の生ずる所、禽獸魚鱉の託する所なり。而るに遊魂變化の家に在れば、卽ち烹爨腥實以て和味を爲す者なり。故に曰く「需は、飲食の道なり」と。

坤宮は地・婦人の職・百穀果蓏の生ずる所・禽獸魚鱉の託する所、つまり養うことが本義であるが、「游魂變化の家に在」るので食用に供されるという。これは「游魂卦においては宮の正性が失われる」という八宮本來の思想に基づいた解釋として理解可能である。

隨 ䷐

【經】大亨貞、無咎。（隨䷐彖傳）

【注】荀爽曰、隨者、震之歸魂。震歸從巽、故大通。動爻得正、故利貞。陽降陰升、嫌於有咎。動而得正、故「無咎」。（『周易集解』卷五）

【經】大ひに亨る、貞、咎無し。

【注】荀爽曰く「隨は、震の歸魂なり。震巽從り歸る、故に大通す。爻を動かし正を得、故に利貞。陽降りて陰升るは、咎有るを嫌ふ。動きて正を得、故に「無咎」。」

震宮歸魂卦において「震が巽から戻って來た」ことが「大通」の理由だとする。これも「歸魂卦において宮の正性が回復する」という八宮の原義に沿う。

益䷩

【經】王用享于帝、吉。（益䷩六二爻辭）

【注】干寶曰、聖王先成其民而後致力于神、故「王用享於帝」。在巽之宮、處震之象、是則蒼精之帝同始祖矣。（『周易集解』卷八）

【經】王用て帝を享す、吉。

【注】干寶曰く「聖王先づ其の民を成して後神に力を致す、故に「王用て帝を享す」と。巽の宮に在りて、震の象に處る、是れ則ち蒼精の帝と始祖同じくす。」

蒼は五行で木。蒼精之帝は東に配當される五帝の一である蒼帝か。震も巽もともに五行は木・方角は東に配當される。

解䷧

【經】雷雨作而百果草木皆甲宅。（解䷧彖傳）

【注】荀爽曰、解者、震世也。仲春之月、草木萌牙。雷以動之、雨以潤之、曰以烜之、故「甲坼」也。（『周易集解』卷八）

【經】雷雨作りて百果草木皆甲宅す。

【注】荀爽曰く「解は震世なり。仲春の月、草木萌牙す。雷以て之を動かし、雨以て之を潤し、曰以て之を烜かす、故に「甲坼」するなり。

解卦が震宮の卦であることから、草木の芽生えなどに合う時期である「仲春の月」を引き出している。

井䷯

【經】井。改邑不改井。無喪無得、往來井井、汔至、亦未繘井、羸其瓶、凶。（井䷯卦辭）

【注】干寶曰、水、殷德也。木、周德也。夫井、德之地也。所以養民性命而清潔之主者也。自震化行、至於五世、改殷紂比屋之亂俗、而不易成湯昭假之法度也。故曰「改邑不改井」。（『周易集解』卷十）

【經】井。邑を改むるも井を改めず。喪ふこと無く得ること無し、往來井井、汔ど至るも、亦た未だ井に繘せず、其の瓶を羸る、凶。

【注】干寶曰く「水は殷德なり。木は周德なり。夫れ井は、德の地なり。所以に民の性命を養ひて清潔の主なる者なり。震自り化行り、五世に至り、殷紂比屋の亂俗を改め、成湯昭假の法度を易へざるなり。故に曰く「邑を改めて井を改めず」と。」

井は震宮五世卦。五世に至って「亂俗」がある、という理解が五世卦における「正性」の勢力を反映してのことであろう。

豐䷶

【經】豐。亨。王假之、勿憂。宜日中。（豐䷶卦辭）

【注】干寶曰、豐坎宮陰、世在五。以其宜中、而憂其側也。坎爲夜、離爲晝、以離變坎、至于天位、日中之象也。聖人德大而心小、既居天位、而戒懼不怠。勿憂者、勸勉之言也。猶詩曰、上帝臨爾、無貳爾心。言周德當天人之心、宜居王位、故「宜日中」。（『周易集解』卷十一）

【經】豐。亨る。王之に假る。憂ふる勿れ。日中に宜し。

【注】干寶曰く「豐は坎宮の陰、世は五に在り。其の宜中を以って、其の側を憂ふるなり。坎は夜と爲し、離は晝と爲し、離を以って坎を變じ、天位に至るは、日中の象なり。聖人は德

大にして心小なれば、既に天位に居るとも、戒懼して怠らず。憂ふる勿れとは、勸勉の言なり。猶ほ詩に「上帝爾に臨む、爾が心に貳無し」と曰ふがごとし。言ふこころ周德の天人之心に當たり、宜く王位に居るべし、故に「日中に宜し」と。

離が坎を變じて初爻から五爻すなわち天位に至る、という説明は八宮説の機序そのものである。

以上見たように、『周易集解』中に言及される八宮は、五行や十二月の配當まで含めて『京氏易傳』のそれとなんら變わりがない。八宮説の核心である「正性」についてもそれは同様で、五世卦・游魂卦における衰微や歸魂卦における回復を明確に意識した記述が複數見られる。

2-2 『周易集解』における飛伏

八宮が『京氏易傳』の形を保っているのに對し、飛伏にはかなりの變質が見られる。まず指摘しておきたいのは、『集解』中の「飛」の文字は全て「飛ぶ」を意味しており飛伏とは關係がないこと[8]、そして「伏」の字はより一般的に「伏藏」の意味で用いられていると思われるケースが多いということである。この點は、『集解』中最も「伏」に言及する虞翻の注にも現れている。虞翻は「坎爲水……爲隱伏」(『周易集解』卷十七)について以下のように述べている。

虞翻曰く「陽坤中に藏す、故に「隱伏と爲す」なり。(『周易集解』卷十七)

では『集解』に含まれる「伏」字のうち、どれほどが「飛伏」と關わりがあり、また京房の「飛伏」をそのまま繼承しているのだろうか。『集解』中の「伏」字全78文字の使われ方を整理すると以下のように整理できる。

■ 爻の「伏」を言う例……16例(虞翻14 荀爽2)
■ 八卦について「伏」を言う例……15例(虞翻5 荀爽5『九家易』4 崔覲1)
■ 卦象の反轉とは無關係に、卦義の解釋として「伏藏」の意味を指摘する例……24例(虞翻11 干寶2 鄭玄2 宋衷2『周易』原文2『九家易』1 その他4)
■ 「伏羲」……12例
■ その他(「降伏」の意など)……11例

「伏」の字の大半が虞翻注に含まれていることからわかるように、『集解』中で飛伏に觸れる易家としてまず擧げられるのは虞翻である。しかし、このうち『京氏易傳』の飛伏と關わりが多少なりともあると認められるのは上の2項目31例にすぎない。さらにそのうち前者の16例はすべて京房の飛伏の原則に違反し、後者の中でも飛伏の規則を十分に反映していると確定できるのはたったの一例である。以下に實例を見る。

◎爻の「伏」を言う例

先にも述べたように飛伏は六十四卦の上下體のうちいずれかに注目することから始まる。よって「一爻のみ飛伏」というものは少なくとも『京氏易傳』には存在しない。しかるに、虞翻の説く「伏」とは大

半がこの形である。以下に例を示す。

離 ䷝

【經】離、麗也。日月麗乎天、百穀草木麗乎土。重明以麗乎正、乃化成天下。柔麗乎中正、故亨。（離䷝彖傳）

【注】虞翻曰、柔謂五陰。中正謂五伏陽。出在坤中、畜牝牛。故「中正」而「亨」也。（『周易集解』卷六）

【經】離は麗なり。日月は天に麗き、百穀草木は土に麗き、明を重ねて以て正に麗き、乃ち天下を化成す。柔は中正に麗く、故に亨る。

【注】虞翻曰く「柔とは五陰を謂ふ。中正とは五の伏陽を謂ふ。出でて坤中に在り、牝牛を畜ふ。故に「中正」にして「亨」なり」。

中正とは二の陰爻か五の陽爻を指す言葉だが、離卦の五は陰爻である。しかるにここでは五の陰爻の裏に陽爻が伏しており、それを「中正」であるとする。爻單獨の「伏」である。

大過 ䷛

【經】澤滅木、大過。君子以獨立不懼、遁世無悶。（大過䷛象傳）

【注】虞翻曰「君子謂乾初。陽伏巽中、體復一爻、潛龍之德、故稱「獨立不懼」。違則憂之、乾初同義、故「遁世無悶」也。」（『周易集解』卷六）

【經】澤の木を滅するは、大過なり。君子以て獨立りて懼れず、世を遁れて悶無し。

【注】虞翻曰く「君子とは乾初を謂ふ。陽巽中に伏し、體一爻を復すれば、潛龍の德あり、故に「獨立して懼れず」と稱す。違へば則ち之を憂へ、乾初と義を同じくす。故に「世を遁れて悶無し」なり。」

大過卦の初爻は陰爻、下體は巽☴。下體巽の中に初陽爻が潛んでいるのが「潛龍の德」であり、これが復活するので「獨立して懼れず」であると説明している。説かれているのはやはり爻單獨の「伏」である。

睽 ䷥

【經】……柔進而上行、得中而應乎剛……（睽䷥彖傳）

【注】虞翻曰……剛謂應乾、五伏陽、非應二也。（『周易集解』卷八）

【經】……柔進みて上行し、中を得て剛に應ず……

【注】剛とは乾に應ずるを謂ふ。五の伏陽なり、二に應ずるに非ざるなり。

これは睽卦の六五が「應」じているのは九二ではなく六五の背後に「伏」している乾卦の九五であるという意味。一爻に注目しており、京房の飛伏とは異なる。

益 ䷩

【經】益之用凶事、無咎。有孚中行、告公用圭。（益䷩六三）

【注】虞翻曰「公謂三、伏陽也。三動體坎、故「有孚」。震爲中行、爲告、位在中、故曰「中行」。三、公位。乾爲圭、乾之三、故「告公用圭」。圭、桓圭也。」（『周易集解』卷八）

【經】之を益すに凶事を用ふれば、咎無し。孚有りて中行し、公に告ぐるに圭を用ふべし。

【注】虞翻曰く「公とは三を謂ふ、伏陽なり。三動きて坎を體す。

故に「孚有り」。震は中行と爲し、告と爲し、位中に在り、故に「中行」と曰う。三は公位なり。乾は圭と爲し、乾の三、故に「公に告げて圭を用ふ」と。圭は、桓圭なり。」

益卦の三爻は陰爻。その陰爻に隠れた伏陽が表に現れると、二爻から四爻の互體に坎☵が現れる、これが「孚有り」である、という。爻單獨の「伏」である。

困䷮

【經】澤無水、困。君子以致命遂志。（困䷮象傳）

【注】虞翻曰、君子謂三。伏陽也。否坤爲致、巽爲命、坎爲志、三入陰中、故「致命遂志」也。（『周易正義』巻九）

【經】澤に水無きは、困。君子以て命を致し志を遂ぐ。

【注】虞翻曰く「君子とは三を謂ふ。伏陽なり。否の坤は致と爲し、巽は命と爲し、坎は志と爲す。三は陰中に入る。故に「命を致し志を遂ぐ」なり。

困の三爻は陰爻であるからその裏に君子たる「伏陽」がいるとするもの。これも爻單獨の「伏」を説く。

◎八卦の「伏」を言うが、飛伏の規則に反している例

この場合は前項の例に比べある程度京房の「飛伏」の影響が色濃い。しかしその場合でも、京房が提起した規則が遵守されているとは限らない。

蒙䷃

【經】九二、包蒙、吉。納婦、吉。子克家。象曰、子克家、剛柔接也。（蒙䷃九二爻辭・象傳）

【注】虞翻曰、坤爲包。應五據初、初與三四同體、包養四陰、故「包蒙、吉」。震剛爲夫、伏巽爲婦、二以剛接柔、故「納婦、吉」。二稱家。震、長子、主器者。納婦成初。故有「子克家」也。（『周易集解』巻二）

【經】九二、蒙を包ぬ、吉。婦を納る、吉。子、家を克む。象に曰く、子、家に克つ、剛柔接するなり。

【注】虞翻曰く「坤は包と爲す。五に應じ初に據り、初と三四とは體を同じくし、四陰を包養す、故に「包蒙、吉」。震剛は夫と爲し、伏巽は婦と爲し、二は剛を以って柔に接す、故に「納婦、吉」。二は家と稱す。震は長子にして、器を主る者。婦を納れ初を成す。故に「子克家」と有るなり。」

ここでは蒙卦の二爻から四爻の互體震に對して伏卦を取っているが、『京氏易傳』の飛伏が問題にするのは上下體のみである。

復䷗

【經】雷在地中、復。先王以至日閉關。商旅不行。后不省方。（復䷗象傳）

【注】虞翻曰、先王謂乾初。至日冬至之日。坤闔爲閉關。巽爲商旅、爲近利市三倍、姤巽伏初、故商旅不行。姤象曰「后以施命誥四方。」今隱復下、故后不省方、復爲陽始、姤則陰始。天地之始、陰陽之首。已言先王、又更言后。后、君也。六十四卦、唯此重耳。（『周易集解』巻六）

【經】雷地中に在るは、復。先王至日を以て閉關す。商旅行かず。后は方を省みず。

【注】虞翻曰く「先王とは乾初を謂ふ。至日とは冬至の日なり。坤闔は閉關と爲し。巽は商旅と爲し、「近利市三倍」と爲し、姤巽初に伏す、故に「商旅行かず」。姤象曰く「后以て命を施し四方に誥す」。今復下に隱る、故に「后方を省みず」、復は陽の始と爲し、姤は則ち陰の始なり。天地の始、陰陽の首。已に先王と言ひ、又た更に后と言ふ。后は、君なり。六十四卦、唯だ此れ重なるのみ。」

復卦の下體に姤の下體が伏しているとする。しかし『京氏易傳』の飛卦伏卦には八宮卦だけを當てるので、この論法はやはり飛伏の本義に即していない。

◎八卦の「伏」を言い、京房の「飛伏」と合致してはいるが、ごく單純な部分にとどまる例

坤 ䷁

【經】龍戰於野、其血玄黃。（坤䷁上六爻辭）

【注】荀爽曰、消息之位、坤在於亥。下在伏乾、爲其兼於陽、故稱「龍」也。（『周易集解』卷二）

【經】龍、野に戰ふ、其の血玄黃。

【注】荀爽曰く「消息の位、坤は亥に在り。下には伏乾在り、其れ陽を兼ぬると爲す、故に「龍」と稱するなり。」

これは「飛伏」中で最も代表的な八宮卦の飛伏を說いたもの。3種の飛伏のうちで最も命脈を保ったタイプといえるが、近人がこのタイプの飛伏のみを擧げて全ての飛伏を說明したかのごとく解釋する例の多さを鑑みれば、この記述を以て全ての飛伏が『京氏易傳』の說く通りに理解されていると即斷はできない。

◎京房の「飛伏」を十分反映している例

繫辭下傳

【經】上古結繩而治、後世聖人易之以書契。百官以治、萬民以察、蓋取諸夬。

【注】九家易曰、古者無文字、其有約誓之事、事大大其繩、事小小其繩、結之多少、隨物衆寡、各執以相考、亦足以相治也。夬本坤世、下有伏坤、書之象也。上又見乾、契之象也。以乾照坤、察之象也。夬者、決也。取百官以書治職萬民、以契明其事。契、刻也。大壯進而成夬、金決竹木、爲書契象、故法夬而作書契矣。

【經】上古は結繩して治まるも、後世の聖人之に易ふるに書契を以てす。百官以て治まり、萬民以て察するは、蓋し諸を夬に取る。

【注】九家易曰く「古者文字無く、其れ約誓の事有らば、事大なれば其の繩を大にし、事小なれば其の繩を小にし、結の多少、物に隨ひて衆寡し、各おの執りて以て相考へ、亦た以て相治むるに足るなり。夬は坤世に本づき、下に伏坤有るは、書の象なり。上に又た乾見はるるは、契の象なり。乾を以て坤を照らすは、察の象なり。夬は、決なり。百官を取りて書を以て萬民を治職し、契を以て其の事を明らむ。契は、刻なり。大壯進みて夬と成る、金決竹木は書契の象と爲す、故に法夬して書契を作す。」

夬卦は坤宮五世卦であり、それを以て「伏坤」があるというのは『京氏易傳』の說く飛伏の通りである。よくある誤解では、最も簡單なタイプの飛伏の規則をすべての卦に適用してしまい、夬䷪の伏卦を剝

☲としてしまうのだが、夬䷪は坤宮五世卦であり、したがって夬䷪の裏には坤☷が伏しているとするのが京房の飛伏である。よく誤解されているタイプの飛伏に踏み込んでおり、『京氏易傳』の飛伏全體に對する深い理解を窺わせる。

『集解』中に八卦を擧げて「伏」を言う例を整理すると、それぞれこのような内譯となる。

■　飛伏の規則に反している例……5例
■　飛伏の規則のごく單純な部分のみに言及しているが、正確な理解に基づくかは判別できない……9例
■　飛伏の規則を知悉していると思われる例……1例

◎虞翻の「伏」について

虞翻の「伏」字をある程度合理的に解釋するためには、彼が設定した卦變やその他の技法を考慮に入れなければならない。通例、虞翻は卦辭彖辭のごく早い部分について注して、その卦がどの卦から變じて成ったものかを說明している。また時に「旁通」をも說く。これは「ある卦は、その卦の卦象の陰陽を全て反轉させた卦象の卦と強い關係を持つ」という觀念で、たとえば乾䷀と坤䷁、震䷲と巽䷸は旁通の關係にある。

こうして引かれた卦の卦爻辭や物象が、それ以降の經文解釋において援用されるのもまた通例である。たとえば最初に引いた離䷝の冒頭、虞翻は以下のように述べる。

【經】離。利貞、亨。（離䷝卦辭）
【注】虞翻曰「坤二五之乾、與坎旁通。於爻、遯初之五、柔麗中正、故「利貞、亨」」。（『周易集解』卷六）
【經】離。貞しきに利あり、亨る。
【注】虞翻曰く「坤の二五乾に之く、坎と旁通す。爻に於けるや、遯の初五に之く。柔中正に麗く、故に「貞しきに利あり、亨る」と」。

【經】畜牝牛、吉。（離䷝卦辭）
【注】虞翻曰「畜、養也。坤爲牝牛。乾二五之坤成坎、體頤養象。故「畜牝牛、吉」。俗說皆以離爲牝牛、失之矣。（『周易集解』卷六）
【經】牝牛を畜ふ、吉。
【注】虞翻曰く「畜とは、養なり。坤は牝牛と爲す。乾の二五坤に之き坎を成す、頤養の象を體す。故に「牝牛を畜ふ、吉」と。俗說皆な離を以て牝牛と爲すは、之を失す。」

離䷝について虞翻は「坤☷の二爻と五爻が乾䷀に入る」、あるいは「遯䷠の初爻が五爻と入れ替わる」という卦變により成立すると說明する。『周易集解』中に見える虞翻の卦變では、卦變の起點になりやすい卦がいくつか決まっている。十二消息卦の一部と乾坤がそれに當たる。乾坤が起點となる場合、一方の卦の爻がもう一方に入る（たとえば乾䷀の某爻が坤☷の某爻に之く）という形で說明される場合が多い。十二消息卦を起點とする場合は、ある卦の中で二つの爻の位置が入れ替わるという說明が多い。

離䷝においては、坎䷜と「旁通」すると宣言される。再言すれば、

離䷝の卦象をすべて反轉して得られるのが坎䷜であり、こうした二卦は互いに密接な關係性を持つと虞翻は考える。

こうした言明により、虞翻はこの後の經文解釋において乾䷀・坤䷁や遯䷠、さらには坎䷜の卦辭爻辭や物象を援用する（彼なりの）根據を得たことになるのである。

二條目の例にその發揮を見ることができる。經文の「畜牝牛」の文字に對し、虞翻は「畜は養であり、牝牛は坤䷁である（說卦傳に「坤爲地、爲母……爲子母牛」とある）。乾䷀の二五が坤䷁に之くと坎䷜となるが、坎䷜の二爻から五爻には頤䷚とよく似た象が含まれている。だから經に「畜牝牛、吉」というのだ」と解說している。虞翻流の卦變や旁通の概念を踏まえなければ、なぜ坎䷜や坤䷁によって離䷝の卦義を說くのか理解に苦しむところだが、こうした概念を下敷きにすれば融通無碍に見えた援用にもある程度納得が可能な規則・制約が存在していることに氣づく（ちなみにここには互體を三爻ではなく四爻に見出だすという虞翻一流の技法も含まれている。この場合、坎䷜の二爻から五爻の象が頤䷚の卦象に相似しているという連想から互體を見出だし、義互いに通ずると考える。虞翻はこのような四爻互體のほか、五爻互體をも唱える）。

先に引いた離䷝の「伏」字の話に戻れば、「五伏陽」を以て離䷝の卦義を說くのも、離䷝が坎䷜と旁通をなし、坎䷜が乾䷀の二爻五爻が坤䷁に移動することによって成る卦である以上、彼にとって許された資源の範圍內での立論と言いうるのである。

さらに爻の伏を言う例として、鼎䷱についてみる。

【經】鼎耳革、其行塞。雉膏不食。（鼎䷱九三爻辭）

【注】虞翻曰、動成兩坎、坎爲耳、而革在乾、故「鼎耳革」。初四變時、震爲行。鼎以耳行、伏坎震、折而入乾、故「其行塞」。離爲雉、坎爲膏。初四已變、三動體頤。頤中無物、離象不見、故「雉膏不食」。（『周易集解』卷十）

【經】鼎の耳革まり、其の行塞がる。雉の膏食はれず。

【注】虞翻曰く「動きて兩坎成る、坎は耳と爲す、革はりて乾に在り、故に「鼎耳革」。初四變ずる時は、震は行と爲し、鼎は耳を以って行くも、伏坎震、折れて乾に入る、故に「其の行塞がる」。離は雉と爲し、坎は膏と爲す。初四已に變じ、三動きて頤を體す。頤中に物無く、離象見はれず、故に「雉膏食はず」。」

この一節を理解するためには、背後に未濟䷿と大畜䷙の存在を想定しなければならない。第一に、この部分は鼎卦九三爻辭に對する注であるので、九三を變じた未濟䷿との關係を想定するのは比較的自然である。未濟卦には初爻から三爻・三爻から五爻にそれぞれ坎☵の象がある。故に「動きて兩坎成る」。坎を耳とするのは說卦傳による。さて次文に突然「初四變」ずるとされるが、これには伏線がある。虞翻は鼎卦彖傳「聖人亨以享上帝、而大亨以養聖賢」に對して以下のように注している。

聖人謂乾。初四易位、體大畜。震爲帝、在乾天上、故曰「上帝」。體頤象、三動噬嗑食、故「以享上帝」也。大亨謂天地養萬物、聖人養賢以及萬民。賢之能者、稱聖人矣。

聖人とは乾を謂ふ。初四位を易ふれば、大畜を體す。震は帝と爲し、乾天上に在り、故に「上帝」と曰ふ。體頤象なれば、三動きて噬嗑食らふ、故に「以て上帝を享す」なり。大亨とは天地の萬物を養ひ、聖人の賢を養ひて以て萬民に及ぼすを謂ふ。賢の能者、聖人と

稱す。

要するに、調理器具である鼎は「食」に關するその他の卦と同類項のグループを成しているために、解釋の上で大畜䷙が登場する必然性があったのである。鼎䷱の初と四を變じた卦こそ、この大畜䷙である。大畜䷙が鼎䷱の背後に存在するとすると、大畜䷙の三爻から五爻には震☳が現れているから、鼎卦には二つの坎☵と一つの震☳の伏象があると言い得る。ところが、これら三つの象が鼎䷱の象が完成するに至ってすべて失われ、二から四爻に乾☰が現れる。これが「初四變ずる時は、震は行と爲し、鼎は耳を以って行くも、伏坎震、折れて乾に入る」の意である。

以上を要するに、虞翻は虞翻自身の論理を以て「伏」を唱えている。經文にも十翼にも「伏」を隱藏された爻象・卦象の意味に使う例はないから、こうした意味で「伏」の字を使った點は京房易の影響を受けているのは確かだが、虞翻がこの文字によって表現しようとした觀念は八宮說を基礎に置く京房の「飛伏」とは全く別のものであると言わなければならない。

結　論

『京氏易傳』において提唱された「八宮」と「飛伏」の概念について、本稿では『周易集解』を材料にその歷史的な繼承關係を檢討した。結論を言えば、『周易集解』に收められた諸家は、八宮については『京氏易傳』の理論をそのまま引き繼いでいる一方、飛伏に關してはその規則を大幅に改變しているか、もしくはほとんど獨自の理論に塗り替えてしまっている。

兩者の繼承の有樣を比較すると、八宮說については「正性」の盛衰という本義に十分配慮されているのに對し、「伏」を說く易家は『京氏易傳』流の「飛伏」の規則にはあまり關心を持たなかったようである。思うに「伏」を說く動機は、もっぱら經文解釋に便宜ある卦象を引き出すこと、つまり一つの卦象から複數の卦象を引き出すことにあった。そして「伏」という字は「飛伏」を離れ、むしろなんらか改變を受けた「伏」が代表的なものと目されて『集解』中の多數を占めるほどになった。

本論では虞翻の「伏」について主に檢討したが、虞翻以外の說に話を廣げても、『京氏易傳』の「飛伏」を正確に踏まえた表現は『九家易』の一例のみである。一方で、「伏」が「現在見えている象を反轉したもの」と理解される點は『京氏易傳』（における飛伏の一パターン）と『周易集解』の各家に共通している。先に述べたように、經文にも十翼にも「伏」を隱藏された爻象・卦象の意味に使う例はないから、「伏」字をこのような意味で用いる點には『京氏易傳』の一定の影響が認められる。

この狀況を要するに、『京氏易傳』の八宮說あるいは飛伏說の着想は後の易學に一定の影響を與えたが、八宮が原義を保存した形で繼承された一方、飛伏說が後學を觸發したのはひとえに「ひとつの卦象からより多くの卦象を引き出す」點に留まり、その規則は便宜に合わせて改變されていった、ということであろう。それが故に本來飛伏理論の前提であった八宮を言わない易家にも飛伏の觀念が受け繼がれた、とも言えるが、そこで語られる「伏」は『京氏易傳』の「飛伏」とは別のものとして見なければならない。

ところで、近人の飛伏理解がしばしば混亂していたり、その思想的意義をほぼ論じなかったのも、『集解』のこの有樣に一つの原因があ

るように思う。『集解』は唐代までの代表的な象數易說の集積とされているから、『京氏易傳』を讀み解こうとする際にも當然第一に參照されたであろう。しかし『集解』の中には『京氏易傳』の飛伏をそのまま傳える例はほとんどない。代わりとばかりに見えるのは虞翻の說く「爻の伏」や「互體の伏」の用例ばかりであり、これを基に『京氏易傳』の飛伏を理解しようとすればその原義にたどり着くことは望むべくもない。[9] 八宮說の核心である「正性」の盛衰を卦變とともに描寫する『京氏易傳』の飛伏は、唐代には象數易家にさえ顧みられない遺物となっていたようである。

注

（1）早川泉「飛伏說からみる『京氏易傳』の八宮構造」（『中國哲學研究』第29號 東京大學中國哲學研究會 2017）

（2）朱伯崑『易學哲學史』p.132

（3）例えば朱上揭書 p.131-133

（4）例えば鈴木由次郎『漢易研究』p.212-215、郭彧『京氏易源流』p.73-74

（5）正性潰亂、極乃反、爲游魂。（『京氏易傳』坎宮五世卦豐䷶）

（6）卦復本宮。曰大有。內象見乾、是本位。（『京氏易傳』乾宮歸魂卦大有䷍）

（7）劉玉建『兩漢象數易學研究（上）』p.342 廣西教育出版社 1996

（8）例えば『周易集解』卷一に「虞翻曰「謂四已變、則五體離。離爲飛、五在天、故「飛龍在天、利見大人」也。」とある。虞翻の注には離を飛と解する例がきわめて多い。

（9）胡一桂『周易啓蒙翼傳』には概ね正確な飛伏理解が示されているが、これを參照しているはずの學者の飛伏理解もしばしば誤っているのは不思議なことである。

參考文獻

京房『京氏易傳』（文淵閣四庫全書本、『四庫術數類叢書』上海古籍出版社 1991 所收）

李鼎祚『周易集解』（『儒藏』精華編二所收　北京大學『儒藏』編纂中心編　北京大學出版社 2009）

張惠言『易義別錄』（道光九年皇清經解本、『無求備齋易經集成 184』成文出版社 1976 所收）

朱伯崑『易學哲學史』華夏出版社 1995

朱伯崑著　伊東倫厚監譯　近藤浩之編『易學哲學史』2009

鈴木由次郎『漢易研究』明德出版 1963

辛賢『漢代術數論研究』汲古書院 2002

郭彧『京氏易源流』華夏出版社 2007

劉玉建『兩漢象數易學研究』廣西教育出版社 1996

林忠軍『象數易學發展史（一）』齊魯書社 1994

張文智『孟、焦、京易學新探』齊魯書社 2013

川原秀城『中國の科學思想　兩漢天學考』創文社 1996